九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

私たちとは完全に異なる概念の枠組みについて : 真理と翻訳の観点から

中谷内, 悠
九州大学 : 専門研究員

https://doi.org/10.15017/6758698

出版情報 : 哲学論文集. 58, pp.37-56, 2022-09-22. The Kyushu-daigaku Tetsugakukai
バージョン :
権利関係 :

私たちとは完全に異なる概念の枠組みについて

――真理と翻訳の観点から

中谷内　悠

はじめに

この論文では概念の相対主義について論じる。概念の相対主義にはさまざまな種類があるが、そのうちのひとつを取り上げる。すなわち、私たちの概念の枠組みとは全く異なるような別の概念の枠組みが可能である、という奇抜でエキゾチックな主張を含むような、そういった過激な概念の相対主義について検討する。

過激な概念の相対主義に含まれるこのエキゾチックな主張は、結局のところ、私たちの言語には完全に翻訳することはできないけれど、しかしその言語を使って真であることを語るような、そういった生物が存在しうるという主張に行き着く(Davidson 1974a)。しかし、そのようなことは可能なのか。そもそも、その主張は意味をなすものだろうか。概念の枠組みという考えに対するデイヴィドソンの批判に端を発した一連の議論のなかで、争点となったことのひとつはこの問題である。

これまでの議論では、異なる概念の枠組みについて検討するうえで、真理概念が翻訳概念に依存的か否かという点に焦点

が当てられた。これを概念的なアプローチと呼ぶことにする。デイヴィドソンは、タルスキが提案する真理理論をもとに、真理概念を理解するためには翻訳概念が必要だと考え、そのため、翻訳できない言葉で真なることを語るという考えは意味をなさないと考えた。

しかし、真理概念と翻訳概念の関係に関する彼の考えには批判が向けられる。グロックは、タルスキの真理理論からは、真理概念を理解するために翻訳概念が必要であることは導かれないと主張する。そして、真理概念に必要となるのは、真理の担い手であり、そう考えるなら翻訳できない言語といった考えが意味をなさないとはいえないと言う（Hacker 1996, Glock 2007）。また別の批判によれば、真理概念は翻訳概念よりも基礎的なものであるため、真理は翻訳を必要としない。そして、この考えはデイヴィドソン自身に見いだされることが指摘される（Güter 2011）。真理概念が基礎的な概念なのであれば、真理概念を理解するために翻訳概念は必要なく、デイヴィドソンの議論は失敗することになる。

これら概念的アプローチのもとでの議論がひとつの結論に落ち着いているというわけではない。しかしながら、この論文では、異なる概念の枠組みについて真理と翻訳の観点から考察するための、また別のアプローチを提案したい。概念的なアプローチと対比して、これを形而上学的なアプローチと呼ぶことにする。より具体的にいえば、根元的解釈に関する考察を通じて明らかにされる、文の真理性と文の翻訳のあいだの形而上学的な関係に注目する。その際、真理概念を理解するうえで翻訳概念が必要となると想定するわけでも、その反対に、必要ではないと想定するわけでもなく、いずれも前提としない。そして、文の真理性と文の翻訳のあいだにある種の形而上学的な関係が成り立つことから、異なる概念の枠組みに関する一定の見解を導くことができることを示す。

1. 異なる概念の枠組み

概念の相対主義や概念の枠組みについて論じられるとき、概念とはどういったものとして理解されているのか。ここでいう概念というのは、私たちが対象や性質をどのようなものとして理解するか、ということに関わるのであり（Peacocke 2009. p438）、広く言えば、私たちの世界の理解の仕方だといえる。つまり、私たちはある仕方で世界を理解しているという意味において、私たちはある概念の枠組みをもつといえる。

そして、唯一の概念の枠組みがあるというよりは、生物によって、人によって、あるいは文化集団によって、概念の枠組みには多かれ少なかれ違いがあり、概念の多様性があることは多くの人が認める。例えば、小さな違いでいえば、音楽オタクと音楽に興味がない人とでは、音の識別や楽器、音楽ジャンルに関してそなえている概念が異なっており、同じ曲を聞くとしても捉え方が異なるだろう。それよりも大きな違いは、例えば、江戸時代の人たちと私たちの概念の枠組みのあいだに見出されるかもしれない。そして極限的な話でいえば、私たちとはひとつも同じところがないような、そういった概念の枠組みをもつ異星人などを思考実験の中でイメージできるかもしれない。概念の枠組みが異なるという考えにはさまざまなヴァリエーションがあると思う。しかし、それらのうちには、現実的にありえないだけでなく、形而上学的な意味で不可能だと言われるものがあるかもしれない。あるいは、矛盾を生じさせるような想定を含むために、そもそも意味をなさないと結論づけられるようなものがあるのではないだろうか[1]。他方で、音楽オタクと音楽に興味がない人の違いのように、ありふれたものや理解するのに困難が無いようなものも存在する。ではこれらの境界はどのように引かれるのだろうか。

この論文では、私たちとは全く異なる概念の枠組みに焦点をあてる。つまり、相手が私たちの概念の枠組みとは共有する概念が全くないような概念の枠組みをもつケースについて考える。そのようなことは可能なのだろうか。あるいは、そもそ

も、概念の枠組みが全体として異なるという考えは意味をなすものなのだろうか。これらの問いに取り組む。

そのためにまずは、ある概念の枠組みをもつとはどういうことか、そして、それが異なるとはどういうことか、という点について掘り下げていく。まずは概念の枠組みと言語の関係について述べておこう。どういった言語をもつのかということと、どういった概念の枠組みをもつのかということが独立だと考えられるだろうか。例えば、心のカテゴリーは言語とは異なると考える場合には、それらが独立だと想定することになるだろう。この点は議論の余地のあることではあるが、概念の相対主義について議論する人たちのあいだでは共有された想定として、それらは独立ではなく、どういった言語をもつのかということと、どういった概念の枠組みをもつのかということは同一視される。つまり、概念の枠組みが異なる場合には言語も異なるのである。ただし、言語に関するあらゆる違いが概念の枠組みの違いを生むわけではない。例えば、私が他の人とは違って、コーヒーを「コーシー」と呼ぶことにするとしても、それだけの違いによって何らかの概念に関する違いが生じるとは考えられないだろう。また、日本語話者と英語話者のように、互いに異なる言語を使う人であるとしても、彼らの言語が互いに翻訳できるものであるなら、彼らは同じ概念の枠組みをもつと考えられる。つまり、概念の枠組みは「相互に翻訳可能な言語の集合と同一視されてよい」(Davidson 1974a, p185; 邦訳195頁)。そのため、互いに翻訳することができない言語をもつ人が、異なる概念の枠組みをもつ人だと考えられることになる。

次に、枠組みと内容の区別について。デイヴィドソンによれば、概念の相対主義は、世界の認識の仕方に関する二元論的モデルからの帰結である。このモデルによれば、私たちは、言語や理論といった概念の枠組みをもち、それを通じて、実在や世界、あるいは、経験や感覚所与といった内容を認識するのであり、これが枠組みと内容の二元論と呼ばれる。そして、枠組みと内容の区別が理解可能であるためには、異なる枠組みについて語ることが理解可能でなければならない。というのも、それが理解可能でないならば、同じ枠組みについて語ることも意味をなさず、そもそも内容と区別された枠組みという考えが理解不可能なものになってしまうからである(Davidson 1974a, p197-198; 邦訳211-212頁)。そのため、枠組みと内容の

二元論は、概念の相対主義を必要とすると考えられるわけである。[2] つまり、枠組みと内容の二元論のうちには、私たちとは異なる概念の枠組みを通じて、世界を適切に理解し、認識するということが可能であるという考えが含まれるのである。そして、言語と概念の枠組みが同一視されることを鑑みるなら、つまりは、私たちの言語には翻訳することができない言語を使って、世界について真であることを語るような、そういったことが可能であるという考えが含まれることになる。

2. 真理概念と翻訳概念のむすびつきにうったえた説明

他者が私たちとは完全に異なる概念の枠組みをもち、そのもとで全く異なる仕方で世界を理解しているというのは、結局のところ、他者が私たちの言語には翻訳することができない言語をもっており、そして、その言語を使って世界について真なることを語るということだった。この点が前節で確認された。それは例えば、相手はそのとき自身が置かれた状況について何か語っており、そして彼が言っていることは、その状況で実際に成り立っているのだが、それを私たちの言語へ翻訳することはできない、ということである。しかし、そんなことは可能だろうか。つまり、私たちの言語に翻訳することができない言語をもち、その言語で真なることを語るということはそもそも可能なのだろうか。

さて、真理概念と翻訳概念に焦点を当てると、次のように問われることになる。翻訳できない言語に、真であるという概念が適用されると考えることはできるのか。さらに言い換えれば、ある人が、相手の発話を真であるとみなしているが、同時に、相手が話していることが自身の言語に翻訳されるものだとみなしてはいない、ということがありえるのかどうかと問われることになる。このように概念に焦点を当てる考え方が、異なる概念の枠組みについて考察するための概念的なアプローチである。例えば、「動物ではない猫がいる可能性はあるか?」と聞かれれば、そもそも猫という概念のうちにそれが動物であるということが含まれていることを理由に、「動物ではない猫」という考えがそもそも意味をなさないのではないか、と答

えるだろう。ここで見て取れる考え方が、概念的なアプローチのひとつのわかりやすい例だと思う。同じように「翻訳できない言語で真であることを語るということがありえるのか？」という問いについても、もしも真であるという概念のうちに翻訳できるということが含まれるのであれば、そもそも「翻訳できない言語で真であることを語る」ということが意味をなさないと答えられることになる。つまり「異なる概念の枠組みをもつ」という考えは意味をなさないと答えられることになる。そのため、真であるという概念（真理概念）は、翻訳という概念なしで説明されるようなものなのかどうかということがと重要な問いとなる。

デイヴィドソンは、タルスキの真理理論に依拠しながら、これに対して否定的に答える。彼の議論は必ずしも論証の構造が明瞭ではないが、少なくとも彼の主張のポイントは「翻訳概念から独立には、真理概念は全く理解できない」（Davidson 1974a. p194; 邦訳207頁）ということにある。つまり、相手の言語に適用される真理概念は、そもそも、その相手の言語にどのような翻訳が与えられるのかということから独立に理解されるようなものではない、ということである。そのため、翻訳不可能な言語に真であるという概念が適用されるという考えは意味をなさないといわれることになる。

では、なぜ真理概念は翻訳概念から独立に理解されるようなものではないと考えられるのか。デイヴィドソンは、タルスキの真理理論にうったえてこの点を説明する（Davidson 1974a. p194-195; 邦訳207-208頁）。彼は、真理理論に関するタルスキの説明のうちに、真理概念の使われ方に関する私たちの直観的な理解が示されていると考えているのである。まずはタルスキの考えを確認する。ここでいう真理理論は、対象となる言語についての真理概念の外延を決定しているものである。そして、対象となる言語についての真理理論は、その言語のすべての文sについて、「sは真である iff p」という形式をもち、pはsの翻訳となっているような、そういった定理を導出しなければならないと考えられる。もう少し直観的に理解できるように言い換えてみよう。真理概念は、文に適用される。そしてある言語についての真理概念は、その言語に含まれるすべての文を適用の対象としている。そのため、ある言語についての真理概念の外延は、その言語に含まれるすべての文に関して、

その文に真理概念が適用される必要十分条件を与えることができれば決定されることになる。そして、この節で取りあげたデイヴィドソンの議論にとってはここが重要なのだが、ある文に真理概念が適用される必要十分条件というのは、その文の翻訳によってあたえられるのである。例えば、「Snow is white」が真であることの必要十分条件は、雪が白いということだが、これはまさに「Snow is white」の翻訳なのである（より正確にいえば、「Snow is white」の翻訳である「雪が白い」という表現を使って表される）。そして、ある言語の真理理論は、その言語のすべての文sについて、「sは真であるiff p」という形式をもち、pはsの翻訳となっているような、そういった定理を導出しなければならないと考えられるのである。

真理理論に関する以上のタルスキの説明は次のことを示しているとデイヴィドソンは考える。すなわち、真理概念の使われ方について理解するには、翻訳概念を使わなければならない。つまり、真理概念は翻訳概念から独立に理解されるようなものではないと考えられるのである。よって、翻訳できない言語に、真であるという概念が適用されると考えることはできない。それゆえ、私たちの言語に翻訳することができない言語をもち、その言語で真なることを語るという考えは意味をなさないのである。そして、他者が私たちとは異なる概念の枠組みをもち、そのもとで全く異なる仕方で世界を理解しているという考えは意味をなさないことになる。

3．真理概念と翻訳概念の捉え方に向けられる批判

3−1．真理理論は真理概念の説明を与えていない

デイヴィドソンは真理概念を理解するうえで、翻訳概念が必要となると考えた。この考えは、真理理論に関するタルスキの説明に依拠するものであった。タルスキ流の真理理論では、翻訳概念が使われる。そして、タルスキ流の真理理論において、真理概念の使われ方に関する私たちの直観的な理解が示されている。そのため、真理概念の使われ方について理解する

には、翻訳概念を使わなければならないとデイヴィドソンは考えるのである。

しかしながら、ハッカーやグロックは、タルスキ流の真理理論において真理概念の使われ方に関する私たちの直観的な理解が示されていると考えることに反対する（Hacker 1996, Glock 2007）。端的にいえば、真理理論は、真理とはどのようなものかということを説明しない。この点をグロックは法的な契約の有効性とのアナロジーで説明する（Glock 2007. p391）。契約の有効性に関する次の３つの話は区別される。（1）ある特定の契約が有効かどうか、（2）ある法的体系において、各契約がどのような条件で有効であるのか、（3）契約が有効であるとはどのようなことか。これと同じように、真理に関しても、（1）ある特定の文が真であるかどうか、（2）ある言語において、各文がどのような条件で真であるのか、（3）真であるとはどのようなことか、は区別される。真理理論は（2）への答えであるが、それは真理概念に関する説明、つまり（3）に答えることとは区別されるのである。そのため、タルスキの真理理論を根拠に、真理概念を理解するには翻訳概念が必要だとはいえない、ということになる。

加えてグロックは、真理概念の適用対象が何であるか、というポイントに焦点を当てる。タルスキ流の真理理論に依拠したデイヴィドソンの考えによれば、真理概念の適用対象は文である。しかしグロックの考えでは、真理概念が適用されるのは、文ではなく、文を使って述べられることである。つまり、真理概念にとって必要となるのは、真理の担い手（truth-bearers）であり、述べられること、あるいは考えられることなのである（Glock 2007. p391）。そのため、真理に翻訳は必要ないと考えられるのである。

3－2．真理概念は翻訳や意味概念よりも基礎的である

前節では、真理概念を理解するためには翻訳概念が必要だという考えに向けられた批判をみた。しかしながら、その考えにはまた別の観点からの批判が存在する（Glüer 2011. p217, p220-221）。グルアーによれば、真理概念は翻訳概念よりも基礎

的なものであるため、真理は翻訳を必要としない。つまり、真理概念は翻訳概念とは独立に理解できるだけでなく、翻訳概念は真理概念によって説明されるようなものだと考えられる。そして、この考えはデイヴィドソン自身に見いだされることが指摘される。

3節で確認したように、デイヴィドソンは概念の相対主義に批判を行う文脈では、真理概念は翻訳概念とは独立には理解することができないと主張する（Davidson 1974a）。しかし他方で、彼はこの主張と緊張関係にあるような主張を別の箇所で行っていることをグルアーは指摘している。すなわち、Davidson（2005）によれば、真理概念は最も基礎的な概念のひとつであり、そのため、真理概念を使って、論点先取することなく言葉の意味について説明することができる。この二つの主張は、真理概念と翻訳概念の関係について相反する考えを含んでいるようにみえる。

デイヴィドソン解釈という観点からすれば、このような緊張は解消可能なのか、可能であるとすればそれはどのようにしてか、と問われることになる。また、この論文の関心からすれば、この緊張関係は、概念の相対主義批判に対する脅威ととらえることができる。私たちの言語には翻訳できない言語で真であることを述べるという考えが批判されるとき、その批判は、真理概念を理解するうえで翻訳概念が必要となるということを根拠とするものであった。しかし、真理が最も基礎的な概念であり、意味よりも優先的な概念であるならば、真理を理解するうえで意味を理解することは必要にならないということになる。それゆえ、異なる概念の枠組み批判のための根拠が失われるのである。

4. 形而上学的アプローチ

デイヴィドソンは、真理概念を理解するためには翻訳概念が必要だと考えた。その際、タルスキの真理理論に依拠したのであり、すなわち、真理理論を与えるうえで翻訳概念が必要となるということがそう考える根拠となる。そして、真理概念

を理解するために、翻訳概念が必要であることを理由に、翻訳できない言語で真であることを語るという考えは意味をなさず、異なる概念の枠組みをもつという考えも意味をなさないと結論づける。これに対して、いくつかの批判が向けられるが、それらが焦点を当てるのは、真理概念が翻訳概念を必要とするという考えのもっともらしさである。批判のひとつは、その考えを導くための論証が失敗していることを示そうとする。すなわち、真理理論は真理概念の説明をあたえるものではないので、そこで翻訳概念が必要となるとしても、そのことから真理概念を理解するために翻訳概念が必要だということにはならないと批判する。また他の批判は、真理概念が翻訳概念を必要とするという考え自体に向けられる。グロックによれば、真理概念の適用対象は文ではなく、文を使って述べられること、すなわち、真理の担い手である。そのため、真理概念に必要なのは翻訳ではなく、真理の担い手である。また、グルアーによれば、真理概念はもっとも基礎的な概念なので、真理概念を理解するために翻訳概念は必要とならない。そして、これらの批判が正しいとすれば、翻訳できない言語で真なることを語るという考えが意味をなさないとはいえず、そのため、異なる概念の枠組みをもつという考えが意味をなさないとはいえないということにある。

さて、これら概念的アプローチのもとでの議論がひとつの結論に落ち着いているというわけではない。しかしながら、この論文では、異なる概念の枠組みについて真理と翻訳の観点から考察するための、また別のアプローチが可能であることを示したいと思う。それが形而上学的なアプローチである。より具体的にいえば、根元的解釈に関する考察を通じて明らかにされる、文の真理性と文の翻訳のあいだの形而上学的な関係に注目する。その際、真理概念を理解するうえで翻訳概念が必要となると想定するわけでも、その反対に、必要ではないと想定するわけでもなく、いずれも前提としない。そして、文の真理性と文の翻訳のあいだに、ある種の形而上学的な関係が成り立つことから、異なる概念の枠組みをもつことが不可能であることを導かれることになる。

ただし、どのような形而上学的な関係が成り立つといえるのか、という点については検討の余地がある。通常、根元的解

釈からは、文の真理性と文の意味（すなわち翻訳）のあいだの決定関係が見て取れると考えられている（Davidson 1974c, Pagin 2013, Glüer 2018）。しかし、このことから、異なる概念の枠組みの不可能性は導かれない。私の考えでは、文の真理性と文の意味のあいだには、決定関係だけではなく、帰結関係も成立する。そして、そのことから異なる概念の枠組みの不可能性が導かれる。これらのことを順に論じていく。

4－1．根元的解釈

根元的解釈というのは、言葉の意味について考察するための、ある種の思考実験である。[3] そこにはひとりの話者と、その話者の言葉を理解しようとする解釈者が登場する。解釈者は、話者が使う言語を全く知らず、そして、話者が考えていることについても事前には全く知らない状況から、彼の言語の解釈を試みる。では、解釈者はどのようにして話者の言語を理解することができるのだろうか。

まずは、解釈の達成点を明確にしておこう。解釈者がどのような知識を得られたなら、話者の言語を理解したといえるのだろうか。デイヴィドソンによれば、話者の言語のすべての表現に意味を与えるような、そういった理論（すなわち意味理論）を知ったなら、その言語を理解したといえるのであり、タルスキが与えた真理理論を意味理論とみなすことができる（Davidson 1967, p22-24; 邦訳9-11頁）。[4] ここでいわれる真理理論的な意味論というのは、相手の言語のすべての文sについて、「sは真である iff p」という形式をもつ定理（これはT文と呼ばれる）を導出する理論である。[5]

では、どのような証拠をもとに解釈を行っていくことができるのか。解釈者はまず、話者がある場面でどういった発話をするのかを見てとることができる。あるいは、ある場面で、解釈者が話者の言語に含まれる文を述べたときに、話者が肯定するのか、否定するのかを見てとることができる。そのような観察をもとに、話者がその場面で、肯定された文を真とみなしていると知ることができる。そしてそこから、話者が何らかの誤りに陥っていると考えるための特別な理由がない限りで、

解釈者は話者が述べたその文が、その状況で真であると知ることができる。例えば、真っ暗なところにいる場合には、話者がその状況について誤って認識している場合もあるだろうし、あるいは、話者が麻薬を使っている場合には、幻覚の影響で誤った信念をもっている可能性がある。それら何らかの理由で話者が誤った信念を持っている場合には、話者が真とみなしている文が、実際に真であるとは限らない。しかしそういった理由がない場合には、話者がある文を肯定し、その文を真とみなしていることが分かれば、そこから、その文がその状況で真であると知ることができる。

さて他の文についても解釈者は同じようにして、知識を獲得していくことができる。解釈者は、各文について、話者がその文を個々の状況で真とみなしているかどうかを知ることができる。ここで得られる情報を、文を真とみなす態度に関するデータセット（以下データセットＨＴ）と呼ぶことにする。それをもとに、各文が個々の状況で真であるかどうかを知ることができる。ここで得られる情報を、文の真理性に関するデータセット（以下データセットＴ）と呼ぶことにする。ただし、解釈者はこの段階で、文の真理条件を理解しているわけではない。あくまで、話者が述べた文が、その特定の状況において真であるということを知るのであり、これは、例えば「Snow is white' は真である iff 雪が白い」ということを知ること、つまり、文の真理条件を知ることとは区別される。

そして最終的には、データセットＴをもとに、解釈者は話者の言語の意味理論を知ることができる。[6] つまり、話者の言語に含まれるすべての文ｓについて、「ｓは真である iff p」という形式をもつ定理を導出する理論を知ることができ、話者の言語を理解することになる。

ここでひとつ重要なことは、文の真理性に関する知識から、意味に関する知識を獲得する際に、真理概念を理解するうえで翻訳概念が必要だという考えには頼っていないということである。逆に、翻訳概念とは独立に真理概念を理解することができると想定しているわけでもない。つまり、概念的アプローチ（2、3節）で争点となった問題について、ここではいずれにもコミットせずに考察が進むわけである。

4－2．決定関係

さて根元的解釈は、言語の意味に関わる形而上学的な真理を明らかにするための思考実験だと考えられる（Davidson 1974c, Pagin 2013, Glüer 2018）。そして、根元的解釈を通じて、言語の意味を決定するものが何であるのかが明らかにされる、といわれる[7]。つまり、解釈者が話者の言語の意味を知るために依拠した証拠が、まさに、言語の意味を決定するものだと考えられるわけである。ここでいわれる「決定」というのは、形而上学的な関係として理解されるものであり、次のように定式化される（McLaughlin, Brian and Karen Bennett. 2021）。

性質の集合Aと集合Bに関して、ある二つの対象が、Aに関して違いが生じることなしに、Bに関して違いが生じることが不可能な場合がまさに、AがBを形而上学的な意味で必然的に決定するケースにあたる。

例えば、自然的性質は道徳的性質を決定すると私たちは考えるだろう。ある二つの行為が、全く同じような状況で、そして同じやり方で行われ、そして、同じ結果をもたらすようなものであるとしよう。このような場合に私たちは、二つの行為について違った道徳的評価を行うことはありえないように思う。つまり、ある二つの行為が、その自然的性質に関して違いがないときに、その道徳的性質に違いが出ることはありえないと考えているわけである。

では、言語の意味を決定するものは何か。4－1で確認したように、解釈は概略的にいえば次のようになっていた。

a．解釈者は、各文について、話者がその文を個々の状況で真とみなしているかどうかを知ることができる（データセットHTを得る）。

b．それをもとに、各文が個々の状況で真であるかどうかを知ることができる（データセットTを得る）。

c．そして、話者が合理的な主体であるといえるための構成原理が成立しているという想定のもので、データセットTをもとに、意味理論を知るに至る。

そして、解釈者が話者の言語の意味を知るために依拠した証拠が、まさに、言語の意味を決定するものだと考えられるならば、次のような決定関係が明らかになる。

《決定関係》　データセットHT　⬇　データセットT　⬇　言語の意味理論

このとき、データセットHTが言語の意味理論を決定するという関係も、データセットTが意味理論を決定するという関係も成り立っているといえる。異なる概念の枠組みについて検討するうえでは、翻訳できない文で真であることを述べる、ということが問題となる。そして、ここに関連してくるのは、文の真理性に関するデータセットTと言語の意味理論の決定関係であると思われるので、以降、その決定関係に焦点を当てる。

では、文の真理性と意味のあいだに決定関係が成立することをもとに、異なる概念の枠組みについて、何らかの見解が導かれるだろうか。データセットTには、話者が述べる文が特定の状況で真であるという事実が含まれている。そして、データセットTは、それらの文が含まれる言語の意味理論を決定する。意味理論が与えられるなら、その言語の翻訳を得ることができる。それゆえ、一見すると、相手が真であることを語っていながら、その言語が私たちの言語に翻訳できないということはありえないように思われるかもしれない。もしそれが正しいとするなら、異なる概念の枠組みをもつことは不可能だということになる。というのも、ある人が私たちとは異なる概念の枠組みをもつことは、その人が私たちの言語には翻訳できない文で真であることを述べることとして理解されるからである。

しかしながら、文の真理性と文の意味の決定関係をもとに、私たちの言語には翻訳できない文で真であることを述べることが不可能であるとはいえない。というのも、決定関係が成立するということが意味するのは、データセットTに関して違いがなければ、与えられる意味理論にも違いがでることはありえないということだからである。これは、あるデータセットTが与えられた場合に、必然的に特定の意味理論（つまり、特定の翻訳）が与えられる、ということを意味しない。言い換えるなら、データセットTが与えられた場合に、意味理論が与えられない可能性がない、ということを意味しないのである。というのも「PがQを決定する」ことは「Pが成立する場合にQが必然的に成立する」ことを意味しないからである。この点は、Pと¬Pの関係をみるとわかりやすい。Pと¬Pのあいだには決定関係が成立する。しかしながら「Pが成立する場合に¬Pが必然的に成立する」という言明は当然ながら誤りである。

以上の考察からわかることは、文の真理性に関するデータセットTが意味理論を決定するとしても、あるデータセットが与えられた場合に、その言語に意味理論が与えられない（翻訳が与えられない）可能性は排除されていないということである。それゆえ、異なる概念の枠組みが不可能であるという結論も導かれないのである。

4－3．帰結関係

根元的解釈は、言語の意味に関わる形而上学的な真理を明らかにするための思考実験だと考えられ、そして、文の真理性と文の意味に関する決定関係が明らかになることが前節で確認された。ただし、決定関係が成立することを理由に、異なる概念の枠組みをもつ可能性が否定されることはなかった。しかしながら、根元的解釈を通じて明らかにされる形而上学的な真理は決定関係に限られない。私の考えでは、文の真理性と文の意味（すなわち翻訳）とのあいだには帰結関係が成り立つ。この点を確認したうえで、異なる概念の枠組みをもつということが不可能である、という結論が導かれることを示したいと思う。

まずは、ここでいう帰結関係というのがどういったものなのかを説明する[8]。ストレートに定式化すると次のようになる。

性質Aをもつものは性質Bも同時にもつということが形而上学的な意味で必然的である場合がまさに、性質Aが性質Bを帰結するケースだと考えられる。

決定関係との違いを確認するために、例として物理的性質と心的性質を取り上げてみる。両者のあいだに決定関係が成立することは多くの論者が認めると思うが、他方でそれらのあいだに帰結関係は成り立たないようには思われる。時点t_1と時点t_2で私の物理的性質に全く違いがないとき、つまり、私の脳状態や身体の状態に全く違いがないとき、私の心的性質に違いが生じることはありえないだろう。つまり、物理的性質は心的性質を決定する。しかし、これは前者が後者を帰結することとは区別される。物理的性質が心的性質を帰結するのであれば、私がある脳状態・身体的状態にある場合には、必然的に、私は何らかの心的性質を同時にもつことになる。他方で、決定関係の成立はそのようなことを含まない。そして、例えば、植物状態のように、特定の脳状態・身体的状態にあるにも関わらず心的性質をもたない場合があることを考慮するなら、物理的性質は心的性質を帰結するとは考えられない。このように、決定関係と帰結関係は区別される。

そして私の考えでは、「文の真理性と文の翻訳」に関しては「物理的性質と心的性質」とは異なり、決定関係だけでなく帰結関係が成立する。もう一度、解釈の話に立ち戻ってみる。解釈者が、各文が個々の状況で真であるかどうかを知るなら（つまり、データセットTを得るなら）、そこから、話者が合理的な主体であるといえるための構成原理が成立しいるという想定のもので、意味理論を知ることができるのであった。ここからいえることは、各文が特定の状況で真であるという事実が成立しているとき、つまり、データセットTが与えられている場合、特定の意味理論が必然的に成立するということである。つまり、特定のデータセットTの成立は、特定の意味理論の成立を帰結するといえる。言い換えるなら、特定のデータセッ

トTが与えられているときに、特定の意味理論が与えられることは形而上学的に必然的なのである。これは決定関係に関する主張とは異なる。決定関係に関していわれていたことは、各文がどの状況で真であるかということに関して（つまり、データセットTに関して）どのようなデータが与えられるかということが、その言語の意味理論がどのようなものになるのかを決定する、ということである。この場合、特定のデータセットTの成立は、必ずしも何らかの意味理論が成立することを帰結しない。他方で、この帰結関係が成立するということが根元的解釈から明らかになるのである。

さて、帰結関係の成立は、異なる概念の枠組みが成立することが不可能であることを導く。文の真理性と文の意味のあいだに帰結関係が成り立つということは、各文が特定の状況で真である場合、つまり、データセットTが与えられている場合、必然的に特定の意味理論が成立する、ということである。それゆえ、データセットTが与えられていながら、同時に、その言語に意味理論、すなわち翻訳が与えられないことはありえないということになる。それゆえ、相手が翻訳できない文で真であることを述べているということは不可能だということになる。異なる概念の枠組みをもつということは、翻訳できない文で真であることを述べることだと理解された。それゆえ、異なる概念の枠組みをもつということは不可能だということになる。

結論

この論文では、私たちの概念の枠組みとは全く異なるような別の概念の枠組みといったものが可能であるのか、あるいは、そもそもそのような考えは意味をなすのかどうか、という問いに関心があった。その問いに答えるために、私たちの言語には完全に翻訳することはできないけれど、しかしその言語を使って真であることを語ることが可能か否か、あるいはそもそも意味をなすのかどうかという問題に取り組んだ。これまではおもに概念的アプローチのもとで議論が行われ、真理概念を

理解するうえで翻訳概念が必要となるのかどうか、ということが争点となった。他方でこの論文では、形而上学的アプローチのもとで異なる概念の枠組みについて検討しようとした。まず、根元的解釈に関する考察から、文の真理性と文の翻訳のあいだにどのような形而上学的な関係が成立するのかを明らかにした。すなわち、それらのあいだには決定関係だけでなく帰結関係が成立する。そして、文の真理性と文の翻訳のあいだに帰結関係が成立することを根拠に、他者が、私たちの言語には翻訳することができない言葉で真であることを述べることは、形而上学的な意味で不可能であることが示された。それゆえ、他者が私たちの概念の枠組みとは全く異なるような別の概念の枠組みをもつということは形而上学的な意味で不可能であると結論づけられる。

註

（1）デイヴィドソンは次のように問題を提示する。「パラドックスや矛盾で崩れてしまうような極端な想定がある一方で、理解するのに何の困難もない穏当な事例も存在する。単に奇妙な、あるいは新奇なだけのものから、不条理なものの境界を決めるものは何なのだろうか」（Davidson 1974a, p184; 邦訳193-194頁）。

（2）ただし、この点は議論の余地がある。Glock（2007）は概念の相対主義を否定しながら、枠組みと内容の区別を支持することができると主張する。

（3）以降の根元的解釈に関する説明はDavidson（1973），（1974b），（1974c）を参照している。

（4）このように考えるとき、デイヴィドソンは真理概念に依拠して意味理論がどのようなものになるのかを説明している。ただし、これは2節で言及したデイヴィドソンの考えとは別のものであることに注意してほしい。そこでは、真理概念を説明するうえで翻訳（すなわち意味）概念に依拠した。つまり、説明の方向が異なる。そのため、この論文では意味理論に関するデイヴィドソンの説明が正しいものと想定するのだけれど、そのことは2節で言及したデイヴィドソンの考えが正しいと想定することを意味

しない。

（5）正確にいえば、メタ言語が対象言語と同一であってもよいので、文ｓとｐを表す文が同一の文であってもよい。ただし、この論文で考察の対象となっているのは、私たちとは異なる言語を用いる他者なので、同一の言語のケースは排除して考えておく。

（6）その際、話者が言語能力をもち、思考能力をもつと考えられる程度に合理的な行為者であると考えるための構成原理に依拠することで解釈が可能となる（Davidson 1973, p136-137; 邦訳137-138頁）

（7）あるいは、付随という概念を使って次のように言われる。すなわち、言語の意味が何に付随するのか、ということが明らかにされる。

（8）帰結関係に関する理解は McLaughlin, Brian and Karen Bennett（2021）を参考にしている。

参考文献

Davidson, D.（1967）. “Truth and Meaning”, Reprinted in Davidson（1984）.

Davidson, D.（1973）. “Radical Interpretation”, Reprinted in Davidson（1984）.

Davidson, D.（1974a）. “On the Very Idea of a Conceptual Scheme”, Reprinted in Davidson（1984）.

Davidson, D.（1974b）. “Belief and the Basis of Meaning”, Reprinted in Davidson（1984）.

Davidson, D.（1974c）. “Replies to David Lewis and W. V. Quine”, Synthèse 27 : 345-349.

Davidson, D.（1984）. *Inquires Into Truth and Interpretation*. Oxford: Clarendon Press.（邦訳Ｄ・デイヴィドソン『真理と解釈』、野本和幸・植木哲也・金子洋之・高橋要訳、勁草書房、1991年）

Davidson, D.（1988）. “The Myth of the Subjective”, Reprinted in Davidson（2001）.

Davidson, D.（2001）. *Subjective, intersubjective, objective*. Oxford: Clarendon Press.（邦訳Ｄ・デイヴィドソン『主観的、間主観的、客観的』、清塚邦彦・柏端達也・篠原成彦訳、春秋社、2007年）

Davidson, D.（2005）. *Truth and Predication*. Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press.（邦訳D・デイヴィドソン『真理と述定』、津留竜馬訳、春秋社、2010年）

Glock, H. J.（2007）. “Relativism, commensurability and translatability”, Ratio 20: 377-402.

Glüer, K.（2011）. *Donald Davidson. A Short Introduction*. New York: Oxford University Press.

Glüer, K.（2018）. “Interpretation and the Interpreter: On the Role of the Interpreter in Davidsonian Foundational Semantics”, in Brian Rabern; Derek Ball（ed.）, *The Science of Meaning: Essays on the Metatheory of Natural Language Semantics*（pp. 226-252）. Oxford University Press.

Hacker, P. M. S.（1996）. “On Davidson’s Idea of a Conceptual Scheme”, Philosophical Quarterly 46,pp289-307.

Henderson（2013）. “Conceptual Schemes,” In *A Companion to Donald Davidson*. Ed. by Ernest Lepore; Kirk Ludwig. Oxford: Wiley-Blackwell.

Lepore, E and Ludwig, K.（2005）. *Donald Davidson. Meaning, Truth, Language, and Reality*. Oxford :Oxford University Press.

McLaughlin, Brian and Karen Bennett（2021）. “Supervenience”, The Stanford Encyclopedia of Philosophy（Summer 2021 Edition）, Edward N. Zalta（ed.）, URL = <https://plato.stanford.edu/archives/sum2021/entries/supervenience/>.

Pagin, Peter（2013）. “Radical Interpretation and the Principle of Charity”. In: A Companion to Donald Davidson. Ed. by Ernest Lepore; Kirk Ludwig. Oxford:Wiley-Blackwel.

Peacocke, C.（2009）. “Concepts and Possession Conditions”, in B. McLaughlin and S. Walter, eds, *The Oxford Handbook of Philosophy of Mind*. Oxford: Oxford University.

（九州大学・専門研究員）